

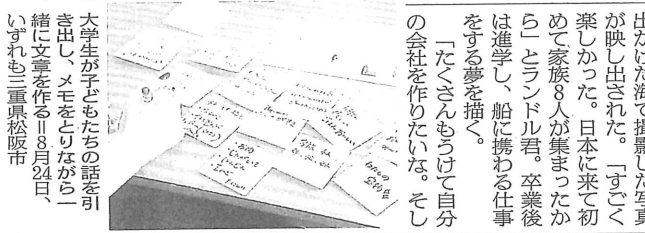
「家族は宝」

海外から移住の子 映像で自己表現

2分間の「フォトストーリー」には、外国にルーツを持つ子どもたちの思いが詰まっている。さびしいのに、ありがたうって言いたいのには……。日本語が苦手、普段はうまく感情を表現できない子どもたちのために、大学生らが上映会を企画した。

松阪 大学生らと上映会

三重県松阪市の子ども支援研究センターで8月下旬、フォトストーリーの上映会があった。映し出されるのは、外国籍や海外にルーツを持つ子ども18人の作品。はにかみながら大型モニターを見つめる子どもたちの姿を家族や日本語教育



●愛知淑徳大の学生（右手前）が、子どもたちから家族のことや日本に来て困ったことなどを聞いていた。8月24日
●フォトストーリーを発表するフィリピン出身の2人の中学生、愛知淑徳大の学生（右端）が手伝った。8月25日

大学生が子どもたちの話を引き出し、メモをとりながら一緒に文章を作る。8月24日、いずれも三重県松阪市

作品をつとあえたね。」の上映が始まり、少し幼さが残るランドル君のナレーションが流れる。「僕が赤ちゃんのとき、パパとママは日本へ行った。だからママとパパの顔がよくわからなかった。覚えていなかった。その後、お兄さんとお姉さんが日本へ、行っちゃったんだ。僕は、さみしかったよ。」モニターには、小学6年生のときに、家族で出て出かけた海で撮影した写真が映し出された。「すごく楽しかった。日本に来て初めて家族8人が集まったから」とランドル君。卒業後は進学し、船に携わる仕事をすることを描く。「たくさん歩いて自分の会社を作りたいな。そして、家族8人が一緒に暮らせる家を作りたい。」上映後、温かい拍手が起きた。松阪市では、フィリピン人らが目撃外国人が急増。04年に70人だった外国人の児童・生徒が、今年5月には約330人に増えた。市によると、近隣の工場で働く外国人が増え、コミュニケーションができたことが一因。日本語指導が必要な子どもは5月時点で、268人いるという。

上映会場の子ども支援研究センターでは、外国人の子どもたちに初歩的な日本語や日本で生活するために必要な知識が学べる「いっぼ教室」を開いている。松阪市教育委員会の管轄で、ランドル君もここで学んだ一人だ。「ほくとわたしのフォトストーリー」と題された上映会は、愛知淑徳大の小島祥美准教授と、松阪市教委が企画し、2008年に始まった。狙いは、子どもが自己肯定感を高めること。外国にルーツを持ち、日本語が苦手な子どもは、自分の思いをうまく伝えられずに自尊心が持てないことがあるという。

小島ゼミの学生と子どもが2日間話し合い、「家族」「将来の夢」などをテーマに文章を練る。作文を音読した音と写真をタブレット端末に取り込み、フォトストーリーに仕立てる。参加した愛知淑徳大2年の館野健吾さん(19)は「子どもたちはみんな家族が好きで幸せそうだった。日本人とか外国人とか関係ない」と話した。小学6年生のバラス・サニエル君(11)は、日本生まれで両親と妹の4人家族。一時期、母国の親族に預けられていたときの思いを1分30秒の作品に込めた。「僕は小さい時、お父さんとお母さんとフィリピンのおじいちゃんの家に行った。お父さんとお母さんは先に日本に戻ったんだ。僕はともさみしかった。」父親のローリネルさん(32)は「彼が5歳のとき、行かないでと言っていて抱きついてきたことを思い出します。成長して最近はお数が少なくなりましたが、家族を大事に思ってくれてうれしい」と喜んだ。離れたなれになって家族のありがたみを感じたというサニエル君の作品は、こう結ばれていた。「家族は僕の宝物」(斎藤佑介)

●デジタル版に動画